



四月の予備校は暗かった――大学受験の失敗者ばかりが集まっているんだから、当然といえば当然か。もちろん、偏差値がめちゃ高い超難関校志望者の中には、最初から現役は腕試し、本番は一年みっちり受験準備をしてからと、割り切って予備校に入ってくる者もいるし、滑り止めには合格をもらったが、どうしても第一志望にこだわりたいと浪人を選ぶ者もいる。だから、ひとくくりに「失敗者」呼ばわりは失礼なんだけど。

でも。四月の予備校は暗かった。それはぼく自身が、まさかの合格ひとつもなし、問答無用の浪人生活に暗澹とした気分だったせいかもしれない。十八にして人生最初・最大の挫折に、ぼく、篠田啓吾は予備校入学当初、相当に暗い顔をしていた。

けれどそれも、ほんの最初の一ヶ月ほどのこと。全員がほぼ同じ挫折を経験している集団に属しているあいだに、ぼくは「ああ、自分だけじゃないんだ」と身に沁みて感じられるようになって、そのうち強がりじゃなく、「浪人は受験の一形態」とまで断言できるようにもなった。クラスにも親しい友人が出来て、休みの日には一緒に出掛けたりもするようになった。だいたいいつまでも落ち込んでいられるほど、予備校は甘くない。「せっかく浪人というチャンスを得られたんだから、ひとつでもふたつでもランクアップしろ」と尻を叩かれ、「おまえたちの未来のために、俺たちは全力でバックアップするぞ!」と熱い講師陣に日々叱咤激励される。そして、ぼくたち自身にも現役時代とはちがう情熱が培われていく。

そんな、予備校での日々の中。

ぼくは「彼」の存在に気づいた。

予備校のクラスは大きく文系理系に分けられているほか、医学部、難関国立、国立、難関私立、私立と分けられている。ぼくはフツの国立理系クラスで、二次試験に備えた基本授業のほか、センター対策のための選択授業を取っていた。「彼」はぼくと選択科目がかぶるらしく、ほぼすべての授業が同じで、嫌でも顔を覚えてしまったんだけど……「彼」がぼくの存在に気づいていたかどうかはあやしい。

「彼」は、暗かった。

全体のトーンが暗いあいだは目立たなかったけど、夏が近くなり、クラスがずいぶんと馴染んだ空気になってからも変わらず暗い「彼」は、その暗さで目立つようになった。

誰とも挨拶を交わさない。どの教室でもまっすぐに一番前の中央の席を取り、黙々とノートを取り、授業が終わればやはり誰とも目を合わさず、まっすぐ教室を出ていく。予備校は勉強するところで友達を作るところじゃないといえばその通りだったが、それでも「彼」は頑なまでにいつもひとりだった。

夏休みの集中講義が始まる前のことだ。ぼくたちのクラスは「自主壮行会」をやろうじゃないかと盛り上がった。みんなでカラオケにでも行こうと話がまとまって、代表が「彼」に声をかけることになった。

「夏になったら、いよいよじゃん。その前に、ぱあっと一度遊ばないか？」

という誘いに、「彼」は、

「俺を誘うな」

と、一言だった。

予備校生なんて、みんなどこかに負い目を持っている。予備校生なのに遊んでちゃいけないって気持ちはあるし、今年は絶対に志望校に合格しなきゃとプレッシャーも大きい。それでも、受験の天王山といわれる夏休みを前に、たった数時間、羽目を外すのもいいじゃないかと皆の気持ちがまとまっていたのに……。「彼」の一言は冷水にも等しかった。

「あー……まあ、俺たち受験生だしな……」

「うん……」

しおしおと引き下がるクラスメイト。ぼくは不思議なものを見る思いで「彼」を見た。もう少し、柔らかな言い方だってあるだろうにと思ったのだ。

案の定、

「はあ？ お勉強時間が減るのは困りますってかあ？」

陰のある言い方で大声を上げるヤツがいた。「彼」は何も答えない。

「俺たちとカラオケ行くより、お勉強のほうが大事ってか」

さらに絡む声。ようやく「彼」は顔を上げた。

「……カラオケは、嫌いなんだ」

なんだろう、その一言にクラスがシンとなった。うまく言えないけれど、冷たくて固い拒絶感がその声にはあった。

「……まあ、じゃあ、いいじゃん、行きたいヤツだけで行けば」

誰かが言い、ようやくぼくたちは動き出した。ぞろぞろと教室を出る。

振り返ってみると、「彼」山岡大輔は、教室の最前列で強張った背中をこちらに向けていた。

つきあいが悪いヤツだなあ、というのがその時の印象。ぼくの座右の銘……ってほどではないけど、「うまいこと言うなあ」と記憶に残っていることわざは「丸い玉子も切りようで四角、ものも言いようで角が立つ」だったりする。もともと小柄で非力で暴力が苦手なぼくには、出来るだけ周囲と波風立てず、うまくやっていこうとする癖がついていた。

そんなぼくから見ると、山岡大輔は立てなくてもいい波風を立てても孤独を貫こうとする変人、だった。

それなのに、けっこう盛り上がったクラス有志によるカラオケ大会のあと、山岡君に「おはよう」と挨拶の声をかけたのは、ぼく自身が中学時代に「シカト」といういじめを受けたことがあったせいだ。

小柄で非力で暴力が苦手……そんなぼくはいじめやすい対象だっただろうと思う。当時、ぼくがいた中学のクラスではまるで当番制のように順番にいじめが行われていて、昨日まではクラスのリーダー格だったヤツが今日は誰からも口をきいてもらえない、なんてことがザラにあった。ぼくもそんな、うれしくもなければ、自分で選ぶこともできない「当番」に当たって、クラス中から無視された経験があった。

その時に痛感したのは、「無視」は暴力と同じように人の心を傷つけるってことだった。ぼくはちゃんとここにいるのに、まるで誰にもぼくの姿が見えないように振る舞われる、話しかけても視線をそらされる、ぼくに配られるプリントは受け取る手を伸ばしているのに、まるでその手がないかのように空中に落とされる……それは「バカ！」と罵られたり、殴られたり蹴られたりするのと同じように、暴力だった。

その時、ぼくは決めていた。ぼくは絶対に、人を無視しないって。

山岡君にとっては、どうでもいいことだったかもしれない。もともとクラスでいつもひとりだった彼だ。ことさらに挨拶が増えても減っても、彼には関係ないのかもしれない。

でもぼくは……彼に挨拶しない、その他大勢になってしまうのが嫌だった。

「おはよう」

ぼくは教室に入ってきた山岡君に声をかけた。彼はつと目を上げてぼくを見た。

あ、無視されるかなと思った。けど、

「……はよ」

短く低い声が確かにぼくに返されてきた。

彼はそのまますたと定位置の最前列の席に行ってしまったけれど、ぼくはなんとなくうれしくなった。ちゃんと挨拶してくれんじゃん、そんなやなヤツじゃないかも……。たった一言、挨拶を返してもらっただけで、そう考えてしまったぼくは確かにちょっとおめでたい性格だと思う。

その日の昼のことだ。朝の挨拶を交わしたことですっかり調子に乗ったぼくは、昼の休憩時間に入るや、まっすぐに最前列に座る山岡君の元へと急いだ。

「山岡君、お昼はどうするの？」

彼がいつも弁当持参で来て、自販機の並ぶラウンジでひとり弁当を食べているのは知っていた。

「ぼくも今日、お弁当なんだ。よかったら……」

「……うな」

「え」

聞き返したのは、低い声が聞き取りにくかったせいだけだ。

「かまうな、俺に」

繰り返された言葉に、聞き返さなきゃよかったと後悔した。

「え……」

なんて答えればいいんだろう……迷いながら、

「あ……ごめ……邪魔して……」

とかなんとか、ぼくがもごも言っているあいだに、山岡君はすっと立ち上がると鞆を肩に掛けて行ってしまった。

「……」

まっすぐに教室のドアに向かう山岡君の広い背中を、ぼくは絶句したまま見送った。「かまうな」なんて……面と向かって言われたのは初めてのことだった。

ざっくりと斬りつけられたような気がした。無神経に手を出したぼくが悪いんだけど。

ぼくは山岡君を二度と誘わなかった。だけど、挨拶だけは続けた。これで挨拶までやめてしまうのは.....なんか、くやしかったからだ。山岡君も、挨拶ぐらいはつきあってくれてもいいみたいで、「.....はよ」と、ぼそりと返してきた。

でも、挨拶から会話が進む、なんてことにはならなかった。ぼくも懲りていたし、彼からも拒絶オーラが出続けていたからだった。

予備校で挨拶だけ交わす関係。

だけど、予備校時代にもうひとつだけ、彼に関して鮮烈な思い出がある。——うわあ、やっぱり怖い人だっていう、マイナスのイメージをさらに強めた思い出が。

毎週のように模擬試験が行われるようになった秋のある日のことだった。その日、ぼくはセンターに向けての総仕上げのための問題集を買おうと、いつもは使わない駅まで出て、ショッピングセンターのワンフロアを丸々使っている大型書店を訪れた。とにかく大学受験用の書籍が充実していることで有名なその本屋は、夕方になると高校生や予備校生らしいので込み合う。ぼくが行ったのは午前中だったけど、大学受験用の参考書や問題集がずらりと並ぶ書棚の前には背の高い先客がいた。それが山岡君だった。

「や、あ」

校内で挨拶だけ交わすという間柄の彼に、外でばったり出会ったらどうすればいいのか、ぼくは迷って、中途半端に手を上げた。

「参考書？ ぼくは問題集を買おうかと思って。英語と数学、センター用の。ほら、先生が勧めてくれたのを」

「.....」

聞かれてもいないのにしゃべるぼくに、山岡君はだんまりのまま。.....どうしよう。もう何も言わず、本だけ買ってさっさと帰ろう——なまじ知り合いなだけに居心地の悪い沈黙にぼくがそう決めた時、山岡君の手が本棚へと伸びた。

「.....」

黙って差し出してくれたのは、ぼくが探していた英語の問題集だった。

「あ、ありがとう.....」

思わぬ人間の思わぬ親切。驚くぼくに、山岡君は数学の問題集も目ざとく見つけて取ってくれた。

それだけでうれしくなるぼくも、たいがい単純な人間だけど。

「山岡君はなにを探してるの？」

「.....世界史の、要点解説」

「世界史ならオススメがあるよ！ えーっと.....ほら、これ。流れもわかりやすいけど、とにかく暗記向きに作ってあるんだ」

山岡君はぼくが勧めた本を開くと、数ページ、丁寧に目を通す。

「……これにする。ありがとう」

にこりともせず、けれどもきちんと礼を言ってくれた。並んでレジに向かうぼくは少しばかり足取りが軽くなっていたかもしれない。

とにかく広い書店だった。天井近くまで届く高さの書棚が並ぶ通路を歩いている時、通路の反対側から、ふらりと人影が入って来た。面白くもなさそうに本の背を眺めていたその人が、ふとこちらを見た。突然、その足が止まる。ぼくの隣を歩いていた山岡君の足も同時に止まった。

「山岡……」

「東……」

どちらも唸るみたいな声だった。

やたらとカッコいい……ちょっと芸能人みたいな人だった。きつい感じはあったけど。色白で、すごく綺麗な顔で、男なのにアクセサリーをじゃらじゃらつけてて、またそれが似合っていた。ほとんど白に近い金髪をつんつんと立たせるヘアスタイルもカッコよかった。もっと長くても似合いそうだったけど。

ふたりは睨み合うみたいに互いを見て……そして、東と呼ばれた人が鳶色の瞳でぼくのほうをちらりと見た。一瞬、なにか言いたそうに見えたけれど、口を開いたのは山岡君のほうがあった。

「高橋は、どうしてる」

聞かずにいられないって感じだったけど。

「……なに」

東の唇に薄笑いが浮かんだ。なにか、すごく嫌なものを漂わせて。綺麗な顔がとたんに意地悪そうなものになった。

「まだ気になんの」

なんの変哲もない一言。

けど、その一言がとても厳しいものでもあったかのように、山岡君が息を呑むのが隣にいてわかった。

「……元気なのか」

「知らねーよ」

まずいものでも吐き出すみたいに東は答えた。

「あんな淫乱」

ぎょっとした。インラン、なんて、日常生活でめったに耳にすることがない言葉だ。けれど、もっと驚いたのはその後だ。

「え、山岡君？」

山岡君はぐいっと一歩、東へと歩み寄ったかと思うと、その胸倉をいきなり掴み上げた。

「……なんだと？」

「あ？」

たった一言、「あ？」だったけど。その一音で、東の気配が変わった。

なんというか……一瞬で全身の毛が逆立って、戦闘モードに入ったみたい。ぱっと見は色白で優男なんだけど、喧嘩慣れしてるのか、目つきまで一瞬で変わっていた。

「やんのか？」

胸倉を掴まれたまま、東がささやく。

「いいぜ？ 一度おまえのことは本気で殴りたかったんだ」

本気で――憎悪が滴っているような声だった。そばにいるぼくの背中にまで冷たいものが這う。

「……………」

「やろうぜ、山岡」

白い手が誘うように山岡君の頬を撫でた。こんな状況でなぜ笑えるのかわからないけれど、東は笑っていた。それが余計に怖い。

「なあ……おまえだって俺のこと、殴りたいだろう？」

わからない、わからない。なにが起きているのか、どうしてこうなっているのか、ぼくにはなにもわからない。だけど、なにかとてつもなくまずいことが起こりつつあることだけはわかった。

「や、山岡君……」

震える声でぼくは必死に呼びかけた。

「や、やめなよ……喧嘩、よくないよ……」

ふたりはぼくの声なんか聞こえないみたいに睨み合っている。山岡君の黒い瞳と東と呼ばれた人の鳶色の瞳は、視線で相手を射殺したいみたいな勢いで互いの瞳を睨んでいた。

「け、喧嘩するなら……ぼく、店員さん呼ぶよ？」

ぼくがそう言うと、やっと山岡君は掴んでいた東の服を放した。目も逸らして、大きく深呼吸する。東のほうは山岡君がやる気をなくしたのが不満みたいに、チッて舌打ちした。

「つまんねーの。俺もおまえも恨みを晴らすチャンスだったのに」

言い捨てて踵を返そうとする東に、

「……どういうことだ」

山岡君がつぶやいた。

「どういうことだ、東。高橋は……」

東は嫌そうに振り返った。冷たい目が山岡君に向けられる。そして、一言。

「河原に取られた」

「それは……」

なにかまだ言おうとする山岡君を置いて、東はもう言うだけ言ったとばかりに歩み去る。

「山岡君、今のは……」

別にどうしても知りたかったわけじゃない。なんだか複雑そうな人間関係だとはわかったから。ただ、ぼくは「ああ、悪かったな。変なところ見せて」とか、「気にしないでくれ」とか、なにかそういう後始末的なセリフがほしかったんだと思う。

だけど。

「おまえには関係ない」

一刀両断。厳しい口調で言われた。そして、くるりと背を向けられる。

そりゃ.....関係ないことはわかってる、わかってるから、本気で答えがほしくて聞いたわけじゃないのに.....。

「.....」

東って人の胸倉を掴み上げた山岡君。一触即発で殴り合いになりそうだった。あんなふう to 怒った顔で人と睨み合った経験はぼくにはない。

やっぱり山岡君はちょっと怖い。ぼくは改めてしみじみとそう思った。もう、挨拶もやめよう to 。

そして実際、ぼくはそれから予備校に通うあいだ、山岡君に挨拶はしなかったんだけど。

だけど.....。

「あれっ！」

一年の浪人生活の甲斐あって合格した大学で、ぼくは山岡君に会った。入学式後のオリエンテーションだった。

「山岡君！」

階段状に机が並ぶ大講義室で、ぼくは一段上にいる山岡大輔を見つけて大声を上げてしまった。

「同じ大学だったんだね！」

ぼくはいったん机に乗せた鞆をつかむと、山岡君の隣に移動した。

予備校時代の山岡君の態度を思い出せば、ずいぶんと大胆なマネだったけれど、仕方ない。ぼくの志望は地元から遠く離れた地方国立大の工学部だった。初めての地で、初めての独り暮らし.....ぼくは見知った人が誰もいない不安と寂しさで、入学式を迎える頃には立派なホームシックになっていたのだ。

そんな時に知った顔があったもんだから、ぼくは舞い上がった。山岡君でいいから.....っていうのは、山岡君に失礼だけど、人付き合いが悪く、ちょっと怖い山岡君でもいいから、ぼくは友達がほしかった。

それに浪人時代のことは浪人時代のこと、晴れて大学生になった今では、予備校でのことは関係なく、新しく始めればいいじゃないかという気にもなっていた。

「山岡君もT工大だったんだね、知らなかった。どこで受験した？ 受験会場では会わなかったよね？」

「.....」

指を組んで目を落とす山岡君には反応がなかった。ぼくの顔とか覚えていないのかもしれないと思いついた。

「あ.....と、ぼくのこと覚えてる？ 同じ予備校で一緒だった.....」

「……覚えてる」

低くぼそりと落とされる声。覚えてるなら、もう少し反応してくれてもいいじゃないか。

「……ごめん、迷惑だった？ 声かけて……」

つい気弱に聞いてしまう。

「……迷惑じゃないが」

迷惑じゃないが、うれしくもないと顔に書いてあった。

どうしてなんだろう——そこまで人嫌いなんだろうか。

予備校時代は、そりゃ、勉強に打ち込みたいとか、雑音はいらないとか、ストイックになるのはわかるけれど、めでたく合格できたんだから、もう少し柔らかい雰囲気になっているのが普通だろう。山岡君の頑なさに、ぼくは初めて疑問を持った。

「山岡君はこっちに親戚かなにかいるの？ 知り合いとか？」

思い切って踏み込んで聞いてみた。

「いや、誰も知り合いはいない」

まるで知り合いがいないうがいに聞こえた。

「ぼくもなんだ」

なぜ、そんな勇気が出たのかはわからない。たぶん、山岡君の拒絶オーラより、地元を遠く離れての独り暮らしの不安のほうが強かったせいだろう。

「携帯番号とかメルアドとか、交換してもらえない？ なにかあったら……ううん、なんにもないだろうけど、せっかく予備校も大学も同じだったんだから……」

「……………」

暗い顔で視線を落とされたまま黙り込まれる。ぼくがとんでもなくずうずうしいことを要求しているみたいで、居心地が悪くなる。

「あ……携帯とか、持ってないなら……代わりの連絡先とかでも……」

山岡君は黙ったまま、鞆を探った。ストラップもなにもついていない携帯電話を取り出す。

「……番号を交換しても、俺からは連絡しない」

「あ、うん……」

「それでもいいなら」

よほど、やめようかと思った。ぼくだって別に、山岡君と頻繁に連絡が取り合いたいとか、親しくおつきあいしたいとかいうわけじゃない。ただただ、誰も知り合いがいないう不安を少しでもやわらげる材料になればと……。

だけど、ぼくは携帯を開いていた。

街にも教室にも、どこにも知った顔のない寂しさのせいだった。

山岡君も携帯を開いた。

「赤外線でもいい？」

うなずいた山岡君のデータを受け取り、ぼくのデータを送る。

「……篠田、啓吾」

携帯電話を見つめて、山岡君がぼくのデータを読む。……やっぱりぼくの名前も知らなかった

のかと、ぼくは一瞬で携帯番号を交換したことを後悔していた。

ぼくにだって意地がある。背も低くて、軀も細くて、およそ男らしさのないぼくだけど、でも、ぼくにだって意地がある。

さすがに携帯電話から山岡君を消去したりはしなかったけれど、絶対にぼくからは連絡しないぞと心に決めた。

.....だけど。

慣れない独り暮らしの疲れか、カレーとチャーハンしか作れない食生活のせいかな、四月の末にぼくは高熱を出して倒れてしまった。

前の晩に、喉は痛いし寒気がするし、これはまずいなとあったかいお風呂に入って早めに寝たんだけど.....夜中に吐き気を覚えて目がさめた。ひとり便器に向かってげえげえと吐き、よろよろと布団に戻る。布団にくるまっても、全身が氷になったように冷たく、ぼくは震えながら夜を明かした。

朝になったらなったで、今度は頭痛と気分の悪さがハンパなかった。悪寒はよほどましになっていたけれど、その分、熱が上がっているようだった。

『何度あるんだろう.....』

体温計なんかここにあってだろうか。風邪薬は.....母が荷物に入れてくれていたっけ.....薬、薬を飲まなきゃ.....。

起き上がろうとして驚いた。軀に力が入らないのだ。無理に軀を起こしたら、目の前がぐるりと一回転した。

『まずい.....!』

ベッドのヘッドボードにつかまって、めまいをこらえた。よろよろと起き上がり、キッチンを目指す。小さな食器棚の引き出しに確か薬をしまっておいたはずだった。ついでになにか飲み物を.....。

ふらつく軀で引き出しを探り、冷蔵庫を開けた。ミネラルウォーターと風邪薬のビンを手にも、またよろよろとベッドへと戻る。薬を飲もうとビンの蓋に手をかけたけれど.....開かない。どうやっても指先に力が入らず、新品の薬ビンの蓋はびくともしなかった。

熱のせいだろう、それだけのことに涙が出そうになった。

気分が悪くてベッドに倒れ込む。上掛けを軀の下に敷いてしまって、寒い。けれど、もう一度起き上がって布団に入りなおすだけの力が出なかった。

『このまま死んじゃうのかも.....』

薬も飲めず、布団にもぐりこむこともできず.....誰にも知られぬまま.....。

無性に怖くなった。このまま誰にも知られずに死ぬのかと思ったら、たまらなかった。

ぼくは枕元に置いてあった携帯電話を探った。

母に連絡を入れようかと思い、ここまで何時間かかるのかと思い直す。なら、残るのは.....。

ぼくは絶対に自分からは連絡を取るまいと思っていた男の名を押していた。

力強い腕に持ち上げられて、軀を動かされる。ふわんとあったかい布団を掛けられて、ほっとした。

「水、飲むか」

誰だろう？ 問いかけられて夢うつつでうなずいたら、また力強い腕に頭を支えられた。コップを唇に当てられて、こくりと一口だけ飲んだ。

「……もういいのか」

問いに、またぼうとしたまま、うなずく。ゆっくりと頭を枕の上に戻された。

ついで、額に冷たいタオルを乗せられた。

『かあさん……』

来てくれたんだと思ったところで、また、ぼくは夢の世界へと落ちて行った。

ようやく意識がはっきりした時には、窓からの日差しはかなり傾いていた。

『何時だろう……？』

頭をめぐらそうとするけれど、それだけの動きがだるい。部屋の中に目をやると、ベッド脇のミニテーブルにもたれるようにして、大きな影が本を読んでいた。

『あれ……？』

ぼく、独り暮らしじゃなかったっけ。

気配にか、影が顔を上げた。

「起きたのか」

「……山岡君……？」

「水、飲むか」

「あ、うん……」

頭を支えられ、コップを差しつけられる。――夢の中の腕と同じ感触。

「……どうして……」

ゆっくりと枕に頭を戻してもらってから、ぼくはつぶやいた。どうして山岡君がここにいるのか、わからなかった。

「……俺に、電話しただろう」

「……あ」

そういえば、携帯電話を開いた覚えがある……。

「ふにゃふにゃなに言ってるかわからなかったから、とりあえず来てみた」

「あ、ありがとう……あ、でも、住所……」

「携帯のデータにあった。実家の住所もこの住所も」

「カギは……」

「大家さんに連絡して、合鍵で開けてもらった。様子がおかしかったからな」

「……」

ぼくはまじまじと山岡君の顔を見つめてしまった。正直、山岡君がこんなに親切だとは知らなかった。人嫌いかと思っていたのに……。

「ありがとう……すごく、助かった」

「いや……」

山岡君が顔をそむける。お礼を言われたのを嫌がっているように見えた。

「その……ごめんね、迷惑かけて。こんなつもりで、電話番号聞いたんじゃないんだけど……」

結果的には呼びつけて看病させてしまったわけで。ぼくがもごもご謝ると、山岡君はぼくに視線を戻した。――黒い瞳。

いつもは暗く沈んでいる瞳が、その時だけ、少しやわらいでいた。

「病人がよけいなことを気にするな」

「でも……」

「なにか食べれそうなものはあるか。買ってくる」

「え、そんな、申し訳ない……」

「じゃあ、自分で買いに行くか？」

「……すみません、お願いします」

すぐに背を向けられたけど、ぼくはなんだか胸の奥があったかくなっていた。

その晩、山岡君はぼくのアパートに泊まってくれた。

買ってきてもらった体温計は三十九度を超え、トイレに行くにも肩を借りねばならないぼくを心配してくれたからだった。

次の日の朝、学校に行く前に、山岡君はおかゆを作ってくれさえした。

『なんでだろう……』

熱の下がったぼくはベッドの中で、これも山岡君が買って来てくれたチューブタイプのゼリー飲料を飲みながら、ひとり考えた。

ミニテーブルの上にはきのう山岡君が読んでいた雑誌が置かれている。熱のあるぼくを気遣ってか、彼は一度もテレビをつけようとはしなかった。

無口で、表情もあまりなくて……だけど、そばにいてもらって、ぼくはすごく心強かった。山岡君はぼくの顔色を見て、言葉すくなに、でも必要な手助けをしてくれた。

ぼくは今まで、山岡君は人嫌いで、人と関わるのが苦手な人だと思っていた。でも、本当にそうだろうか？

ほかにも疑問があった。ぼくの電話を受けたあとの山岡君の対応だ。山岡君は隣の人に聞いて、大家さんに連絡を取ってくれたという。そしてぼくからの電話のことを説明し、大家さんに立ち会ってもらって、部屋に入ったと。

「治ったら、挨拶に行ったほうがいい」

ぼそりと言われた。

そういう対処能力というか、コミュニケーション能力って、人嫌いで人と関わるのが嫌いな人間に備わっているものだろうか？

予備校で彼が見せた頑なさや、大学でぼくと再会した時のいっそ迷惑そうな素振りと、今回の対応にギャップがありすぎる。ぼくには山岡大輔という人間がわからなかった。あまりにアンバランスじゃないだろうか。

そして――一日を身近で過ごして、ぼくはもうひとつ、気づいたことがあった。

それは山岡君はけっこう、いい男だということ。

暗い表情でいつもうつむき加減にしているから、今まであまり思わなかったけれど……近くでよく見ると、山岡君は目鼻立ちのはっきりした、男らしいいい顔をしていた。短くカットされた黒髪に黒い瞳は精悍な印象だったし、身長も高く、肩幅も広く、胸板もきちんと厚みがあった。ぼくを支える腕も力強くて、あたたかくて……なんかちょっと甘えたくなるというかなんというか……いやいやいや！ それはない！ ないけど！

ともかく、山岡君はぼくなんかとは何もかも正反対な、いい男だった。

『もてるんだろうなあ……』

と、思うのと同時に、

『もったいないなあ』

とも思った。せっかくいい材料を持ってるんだから、もっと明るく、もっと活発になればいいのって。そしたら、きっと、女の子たちがほうっておかない。……今もほうっておかれてるわけじゃないかもしれないけど。

『彼女とか、いるのかな……予備校時代はいない感じだったけど……いや、でも、意外と……』

気がつけば、ぼくはベッドの中でずっと山岡君のことを考え続けていた。

その山岡君からは夕方になって、電話があった。めったに鳴ることのない携帯が鳴って、ぼくは携帯に飛びついた。その頃にはだいぶん、躯が楽になっていた。

「はい！」

「起きてたか」

低く、愛想のない声。

「うん」

「熱は」

「だいぶん、下がった。まだ少しふらつくけど」

「夕飯はどうする」

頼めば、なにか買ってきてくれそうな感じだった。その時、なぜだろう、ぼくの口は勝手に動いていた。

「おかゆ」

「……」

「朝、作ってくれたの、おいしかった」

「……………」

「全部、食べちゃった。おかゆなら、食べられそうな気がする」

沈黙のあと、電話口で溜息が聞こえた。

「……わかった」

短い返事だったけど、ぼくは満足だった。

どうして自分がそんなずうずうしいことを頼めたのか、あとから考えてもわからなかったけれど……電話から三十分後に来てくれた山岡君は、あつあつのおかゆと野菜スープを作ってくれた。

一緒に食べればいいのと言ったら、

「これでは俺の腹はふくれない」

と、これはいつもより仏頂面で言われた。

それでも、ぼくが食べ終わるまでは待っていてくれて、後片付けまでしてくれた。帰り際、心から「ありがとう、助かった」と伝えと、「ゆっくり休め」と返してくれた。

——どうしてだろう……。

身も心も温まって布団にもぐりこみ、ぼくは一日考えていたことを、また考えだした。

面倒見も悪くない、コミュニケーション能力だってある、なのになぜ、山岡君は人に対してあんなに拒絶オーラを出すのだろうと。

ひとりの人間のことを、こんなに長い時間、じっくりと考えるのは初めてのことだった。

そのぼくの風邪以来、ぼくは山岡君とよくつるむようになった。……ちょっと正しくない。つるむというより、ぼくが一方的に山岡君に絡むようになった感じ。

キャンパスを歩いていると、新入生には各クラブやサークルの勧誘がかかる。

「山岡君はどうするの？ なにに入る？」

「……俺は入らない」

「えーそれはもったいなくない？」

「……………」

必要最低限のことにしか、山岡君は受け答えをしない。そんなやや一方的な会話にも、ぼくは慣れた。

「山岡君、体格いいよね。なにかスポーツでもやればいいのに」

「……………」

「中学とか高校は？ なにか部活、やってなかったの？」

「……………」

なぜだかその時の沈黙は、その質問に答えたくないからだとわかった。口元が、きゅっと引き締まったせいかもしれない。

「ぼくは中学は科学部で、高校は歴史研究部だったんだ。中国の歴史とか好きで……」

「俺はいいから」

ぼそりと言われた。

「篠田は好きなサークルに入れ」

ぼくだけがサークルに入ったら、自然と山岡君と疎遠になるだろう。『おまえはおまえで人づき合いしろ』と言われているようだった。そんなのは嫌だと思った。

「ええーせっかくなんだから、同じサークルに入ろうよお」

「.....なにがせっかくなんだ」

邪険にされても、ぼくはめげなかった。臆病ですぐに人の顔色を気にするぼくには珍しいことだったけれど、あの看病で、ぼくは山岡君が悪い人間でもなければ、ぼくのことを心底嫌いなわけでもないと確信していた。

「一緒にのほうが楽しいと思うんだけどなあ」

ぼくの言葉にかまわず、山岡君はすたすた先へ行く。その広い背を追いかけて早足になるのが、ぼくは嫌ではなかった。

「ねえねえ、今日はグラタンが食べたい」

「.....おまえのところ、オーブンはあるのか」

「え、レンジならあるけど？」

「.....グラタンはオーブンがないと作れない」

「え、そうなの！」

意外と料理上手な山岡君に、ぼくは夕飯を作ってもらうことさえあった。

「山岡君は？ オーブン、持ってる？」

「.....」

「持ってるんだ！ ねえ、山岡君ちに遊びに行ったらまずい？」

「.....まずい」

「えーどうして！」

「.....」

「どうして、ねえ、どうしてまずいの？」

ぼくがしつこかったせいだろう、山岡君はしぶしぶという感じで言った。

「夕飯だけだぞ。食ったらすぐ帰れ」

もうほとんどぼくが強引に押しかけるような形で、ぼくは山岡君のアパートに遊びに行くようになったのだった。

——でも.....。

「ほら、帰れ」

夕飯が終わると、必ず山岡君に追い出されてしまう。山岡君はぼくの部屋に来て、絶対に長居はしない。泊まったのは、ぼくが熱を出した夜だけだった。

ぼくがしつこくねだるから、つきあってくれているけれど.....ここから先はダメっていう壁が、山岡君の中にはあった。

冷たくて、堅くて、高い壁。ぼくが、もっと楽しいことしようよって誘っても、「俺はいい」って、山岡君は壁の中から答える、そんな感じ。山岡君自身もそんな壁の中にいて、楽しいはずないと思うんだけど……。

そんなふうに、友人なんだか、ぼくがつきまってるんだかわからない関係が一年ほど続いて、ぼくたちが二年に上がったある日のことだった。

「先輩！ 山岡先輩じゃないですか！」

学食に向かって歩いてたぼくたちは、高く澄んだ声に振り返った。

「きゃああ！ やっぱりそうだ！ 山岡先輩、お久しぶりです！」

T工大は工業系の大学で、女子が少ない。その、どちらかといえば殺風景なキャンパスの中に、ぱっと花が咲いたような鮮やかさで、その子は立っていた。笑顔の可愛い女の子。

「あ、覚えていらっしやらないかな。テニス部で先輩が三年の時に一年だった宮園です」

テニス部？

「……覚えてるよ、久しぶり」

「山岡部長もT工大だって聞いてたんですけど、よかったあ、会えて」

部長？

「山岡部長、OB会にも全然出ていらっしやらないし……高橋先輩とは連絡とったりなさってるんですか？ おふたりがいらっしやらないと盛り上がりませんよー」

高橋？ ……あれ？ どこかで聞いたことがあるような……。

思わずぼくが山岡君の顔を見上げたのと、

「ごめん……ちょっと急ぐから」

と、山岡君が顔をそむけたのが同時だった。笑顔でしゃべる宮園さんをおかわすように、山岡君はくるりと背を向け、今来た道に戻っていく。

あれ？ お昼は？ だけど、山岡君の強張った背中からは、ランチどころじゃない空気を漂わせていた。

「あ、ごめんね」

ぼくなんか眼中にはなかっただろうけれど、一応の礼儀としてぼくも宮園さんに軽く頭を下げながら、山岡君を追う。

「山岡君、山岡君！」

ぼくの呼ぶ声は聞こえているはずだけど、山岡君は足を止めない。まるで……なにかから逃げるように早足で歩いて、そのまままっすぐ校門へと向かう。

「山岡君！」

脚の長さがちがう。懸命に、ほとんど走るみたいにしてぼくが彼に追いつけたのは、門を出たところだった。

「待ってよ……！」

息を切らせながらその腕をつかむ。けれど、ぼくの手はほとんど振り払われるみたいに、はずされた。

「……俺に……かまうな」

「山岡君……」

「かまうな、かまうな、俺に……」

呻くように言って、まるでどこか痛いかのように山岡君は上体をかがめた。こぶしで顔を押さえる。

——こんな彼を見るのは初めてだった。

会いたくない人だったのか、それとも言われたくないことだったのか。

学校の塀に背もたれるようにしてうつむく彼をひとりにしたくなくて、ぼくはそこを動けなかった。なにを言えばいいのかわからない。……なにを言えば、彼の傷に触れずにすむのかわからないから、ぼくは黙っているしかなかった。

「……学校に戻れ」

ようやく小さな声で山岡君が言ったのは、何分ぐらいたってからだったろう。

「おまえは、学校に戻れ。講義が、あるだろう」

「でも……山岡君をひとりにしときたくない」

「……俺は……ひとりにになりたい」

その気持ちはわかった。人は傷が痛すぎる時、たとえ相手が包帯と毛布を手を待っていていても、「いらない」と言ってしまうものだから。けれど、ぼくは首を横に振っていた。どうしても今、山岡君をひとりにしておきたくなかった。

「……ぼくが熱を出した時、山岡君、飛んできてくれたでしょ。それまでは……仏頂面で、なに考えてるかわかんない人だなんて、少し……少しだよ？ 山岡君のこと、怖かったりもしたけど……あの日、わかったんだ。山岡君は本当は優しいよ？ 山岡君はいい人だよ」

顔を伏せたまま、山岡君は首を振った。最初はゆっくり、そしてだんだん、早く。首を痛めるんじゃないかと思うほどに。

「ちがう……！」

泣き声のように聞こえた。

「俺は……優しくなんかいい……いい人なんかじゃ、絶対、ない！ 俺は……俺は……最低な……」

ぼくはハッとして山岡君の顔に押し当てられたこぶしを見た。そのこぶしは、濡れていた。

どうしていいか、わからなかった。ぼくよりずっと大きくて、ひとりでのいるのも平気な山岡君が、ぼくの目の前で泣いていた。

しかも、なぜ泣いているのか、わからない。わからないのに、どうやって慰めればいいのか……。

「山岡君」

どうしていいか、なにを言えばいいか、わからなかったから、ぼくはぼくがしたいようにするしかなかった。

ぼくは山岡君の隣に行って、その肩に腕を回した。細くて弱っちい腕で、広い背中を抱き締めるみたいに。

「山岡君は最低なんかじゃないよ……優しくないなんて、そんなことない。山岡君は最低なん

かじゃない……」

それしか言えなかったから、それだけを繰り返した。

山岡君の肩は小刻みに震えていた。触れてみて初めてわかったけれど、その肩には意外としっかり筋肉がついていた。

――テニス部。

納得できる肩の厚みだった。

――部長。

ぼくを看病してくれた時の山岡君を思い出した。「ああ、そうか」って腑に落ちる。山岡君には行動力と責任感がある。もちろん、人とのコミュニケーション能力も。わかんないけど、高校時代はきっと友達も多かったはずだ。……高橋……その人とも仲がよかったんじゃないだろうか。それに……きっと、女の子にももててたはず。

あ！

突然に思い出した。高橋って名前。あの、山岡君が東という人とあと少しで殴り合いになりそうだった時に出て来た名前だった。

思い出したら胸がドキドキしてきた。

そうだ……あの時、山岡君は高橋って人のことを気にしていた。元気か、とかなんとか。だけど、東は「知らない」って言ったんだ、あんなインランって。なんか……なんか、三角関係、みたいだった……。

彼女、だったんだろうか。高橋さんは山岡君と、つきあっていたんだろうか。それをあの東って人が取った……？ でもまた、高橋さんはほかの人……河原って言ったっけ？ その人につきあっちゃったってこと……？

山岡君の広い背中。高橋さんは……この背中を知ってるんだろうか？ 剥き出しの……裸の背中を？

胸の中を、どろりと気持ちの悪いものが這った。

山岡君は今でもその高橋さんが好きで、だから泣いてるんだろうかと思ったら、その気持ちの悪いものが一気に胸いっぱいに広がった。

『嫌だ！ そんなの、嫌だ！』

叫びだしたいような気持ちに、ぼくはうろたえる。強く、ぼくを動かす感情。

ぼくにはぼくがわがままを言うから、しょうがないって感じでつきあってくれている山岡君だけど……その高橋さんには山岡君から声をかけたりしたんだろうか。山岡君から親しくなろうとしたんだろうか。笑顔を見せて？ いっぱい話をして？

「……すまない」

山岡君がみじろいだ。ハッとしてぼくは物思いから醒める。――ぼくは、なにを……なにを考えていた？

「……みっともないところを見せたな」

まだ瞳は濡れていたけれど……山岡君は顔を上げた。その唇が、照れたような、申し訳なさそ

うな、小さな笑みを浮かべている。――笑みを。

こんな笑顔を、山岡君は高橋さんにはいっぱいいっぱい、見せたんだろうか……？　ぼくなんて、今、初めて見せてもらっているような気がするのに……。

「……うん」

ぼくは首を横に振ってみせた。精一杯、笑顔を作りながら。

家に帰ってからも、ぼくは山岡君と高橋さんについて考えるのをやめられなかった。
――どんな関係だったんだろう？

あの宮園って女の子は『おふたりがいらっしゃらないと』って言ってた。山岡君も高橋さんも同じテニス部で、同じ学年で、『おふたり』って言われるほど在学中は仲がよかった？　そしてどちらも今はOB会に出ていない？

あの東って人はなんだろう？　色白で、遊んでるふうで……同じテニス部には見えなかったけれど……山岡君が知らない高橋さんの消息を、彼は知っている間柄って……。

やっぱり三角関係だとしか思えなかった。

「はあ……」

何度も何度も溜息をつきながら、箸の進まぬ夕食を済ませ、お風呂に入った。こんな日は早く寝てしまうに限ると思ったからだ。……寝付けるかどうか、わからなかったけど。

風呂場から出てきてパジャマを着ながら、小さな洗面台についている鏡を覗き込んだ。

……しょぼくれた顔がこちらを見返す。

大学生にもなって、いまだに中学生にまちがえられる、童顔。目が大きくて、色が白くて。「おまえ、可愛い顔してる」って言われることはあるけど……高橋さんはきっと美人だったんだろうなって、なんの根拠もないけど思う。男で可愛い顔してたって、そんなのなんのトクにもならない。

――トクって？

自分に聞き返す。なんのトク？　……山岡君にかまってもらえる、トク？　……山岡君からかまってくれる……山岡君から好きになってもらえる……？

「……やばっ！」

ひとりで慌てて、ぼくは口元を押さえた。いや、まずい、まずいよ！　なに考えてんだよ自分！

その時だった。ピンポンって、チャイムが鳴った。

「はあい？」

まだ髪を乾かしていなかった。タオルで髪の水気を押さえながら洗面所からすぐの玄関へ出る。時計を見たら、九時を少し回っていた。こんな時間に誰だろう？　宅配便？

「……俺だ。山岡だ」

とくん、と心臓が跳ねた。カギを開ける手が震えそうで、ひとつ大きく息をつく。邪念よ、散れ！　ぼくと山岡君は友達。山岡君に彼女がいたってなんだって、ぼくになんの関係があるも

んか。

ドアを押し開ける。

「どうしたの」

うまく驚いたような声が出せた。

「.....少し、いいか。話があるんだ」

「あ、うん。どうぞ」

一歩中へと入って山岡君を促したけど、山岡君はドアを閉めただけで、靴を脱ごうとはしなかった。

「ここでいい。.....篠田。今までありがとう」

「.....え？」

突然に礼を言われて目が丸くなる。

「俺に.....俺なんかにつきあってくれて、ありがとう」

「そん、な.....なに、突然.....」

「おまえは、いいヤツだ。だから、もう.....これ以上、俺と関わるな」

「え、え、なに.....山岡君、訳わかんないよ！　なに、それどういうこと.....」

「どうもこうもない」

山岡君はとても静かな.....落ち着いた表情のまま、首を横に振った。

「おまえと一緒にいて、とても楽しかった。おまえには感謝している。だからこれ以上、俺なんかに近づかせたくない」

そして、山岡君は微笑んだ。とても優しそうに。こんな顔もできるなんて、知らなかった。

「もう、おまえに話しかけられても返事はしない。おまえも俺を無視してくれていい。今まで、すまなかった。ありがとう」

そんな.....そんな一方的な.....。

「風邪引くぞ。早く布団に入れ。風呂上りにすまなかったな。.....じゃあ」

言うだけ言って背を向けた山岡君に、ぼくは言葉もないままに飛びついた。

「ま.....ま.....」

待ってほしいのに、一語ずつしか出ない。必死でシャツを掴む。

「た、た、高橋さんならいいのっ？」

焦ったぼくの口からはとんでもないセリフが勝手にこぼれていた。

「高橋さんなら.....！」

こんなふうには山岡君からさようならを告げられることなく、つきあっていられるのか。

「な.....」

山岡君の顔が瞬時に強張る。

「.....なんでおまえが高橋を.....」

「きょ、今日！　宮園さんが言ってた！　高橋先輩って.....そ、それに、東って人と会った時にも.....！」

「.....ああ」

眉を寄せた、なにか痛みをこらえるような顔になって山岡君は息をついた。

「あの時、おまえもいたな……」

「彼女……なの、高橋さんって」

ぼくの手をシャツからはがしながら、山岡君はちがう、と呟いた。

「……高橋は……男だ」

「……え……」

てっきり三角関係だと思っていたけど……データを処理しきれないぼくを、山岡君は眉を寄せたまま見つめた。

「でも……そうだ。俺は、高橋が好きだった」

「……………」

「黙っていてすまない。俺は……ゲイだ」

ぼくは口をぽかんと開けてしまった。きっと山岡君が『俺は宇宙人だ』って言っても、ぼくは同じ顔をしたと思う。

山岡君は少し困ったみたいに笑った。

「大丈夫だ。おまえのことは、そんな変な目で見ただことないから」

大丈夫……なにが大丈夫なんだろう……？

「とにかく今までありがとう。……じゃあ」

再びぼくに背を向けようとする山岡君に、ぼくはまた声もなく、手を伸ばした。またシャツを掴む。

「な、んで……ゲイ……だから？　だから、もう……？」

混乱する。どうしていきなり、さようならなのか。ゲイだから？　だから距離を置こうと言うの？

「そうじゃない。そうじゃなくて……」

どこか本当に苦しそうに、山岡君は眉を寄せた。

「おまえは……俺のことを優しいって言う。いい人だって言う。……本当は……俺は最低な人間なのに……おまえは何も知らないから、そんなふうに言う。俺は……それがたまらない……」

ぎゅっと眉を寄せてうつむく山岡君に、ぼくはなんとかぼくの感じていることを伝えたくて言葉を探した。

「なん……そんな……だって本当に山岡君は優しいよ？　ぼく……それを知ってる……」

「おまえは知らない」

覚悟を決めたように山岡君は顔を上げた。黒い瞳がぼくを見る。

「俺は、犯罪者だ」

ゲイだと言われた時より、さらにぽかんとしてしまう。今日の山岡君には驚かされてばかりだと、妙に冴えた頭の一部で思った。

「犯罪者……」

「そうだ」

「警察に……捕まるの？」

「……訴えられていたら……そうだった」

「……………」

だらりと手を垂らしたぼくに、山岡君はなにを思ったんだろう。少しかがんで、正面からぼくと目を合わせてくれた。

「篠田。おまえは本当にいいヤツだ。だから俺みたいな最低な男に関わるな。……楽しかった。本当にありがとう」

今度こそ本当に山岡君はぼくに背を向けた。ぼくの手は脱力したまま、伸びなかった。

山岡君がドアの向こうに消えるのを、ぼくはただ、見つめていた。

鍵をかけるのも忘れて、ぼくは玄関に立ち尽くした。

訴えられていたら、警察に捕まっていた、犯罪者——それは、訴えられなかったから、警察に捕まらずにすんだ、犯罪者ってこと……。

山岡君が……。

信じられなかった。信じられなかったけれど……ぼくはどこかで納得していた。

ああ、だからか……って。

だから山岡君は、本当は優しいし、ちゃんと人付き合いもできるのに、いつもひとりでいたんだ。だから『俺にかまうな』って言ったんだ。山岡君の中にはいつも壁があった。それはこういうことだったのかって、ぼくは納得していた。

その反面、勘違いってことはないだろうかとも思った。

犯罪者っていうのは、山岡君の勘違いで、本当は罪でもなんでもないことを、山岡君はひとりで『これは悪いこと』って決めつけて……ううん、そうじゃなくても、たとえば道徳的に問題のあることを、山岡君は真面目だから、それを『犯罪』みたいに大袈裟に考えちゃったんじゃないかって。

でも——。『警察に捕まるの』って聞いたら、『訴えられていたら、そうだった』って山岡君は答えた。『訴えられていたら』、その言葉には生々しい語感があった。『バレたら』とか、『人に見られたら』じゃない。そんな子供っぽい表現とはちがう、『訴えられていたら』という言葉。

山岡君の勘違いや、考え過ぎなんかのせいじゃない。きっと本当に、山岡君は人に言えないようなことをした……。そして、訴えられて罪になる罪といったら……親告罪。

ぶるりと震えが来た。軀が芯から冷えていた。

寝ている時から、頭が痛かった。気分も悪かった。

「三十八度……」

体温計は容赦ない数値を示す。

こんな時に限って、スポーツ飲料もちょっと食べられるようなパンも切れている。

ぼくは携帯電話を手を取った。迷わず、短縮に入れてある山岡君の番号を押す。

トゥルルルル。トゥルルルル.....。

何度、呼び出し音が鳴っても、山岡君は出ない。

ぼくは何度も掛け直した。どうせ今日は学校にも行けない。ベッドの中で携帯の短縮ナンバーを押し続けるぐらい、平気だった。

十回ぐらい掛けただろうか。

「.....はい」

少し怒ったような声が出た。

「山岡君.....」

「篠田？ 声が.....」

「熱。三十八度四分。ポカリもパンもないんだ」

「.....」

「動けないのに、なにもないんだ.....ぼく、このまま死んじゃうかも」

「バカ。それぐらいで人が死ぬわけないだろう」

「.....気持ち悪い.....」

「おい、篠田？」

慌てたような山岡君の声がぼくを呼ぶのをうれしく聞きながら、ぼくは目を閉じた。熱のせいだろうか、引き込まれるように眠かった。

でも、眠りに落ちながら、ぼくは思っていた。――もう大丈夫。山岡君が来てくれるから大丈夫って.....。

山岡君に聞いたことはショックだった。犯罪者、だなんて。

だけど.....ちょうど一年前、寝込んだぼくを看病してくれたのは山岡君だった。いたずら電話かと思った、鍵が開いてなかったから入れなかった、いくらでも理由をつけて知らんぷりができたのに、様子がおかしいからと飛んできてくれて、大家さんに話をつけて入ってきてくれたのは山岡君だった。無口で、めったに笑わなくて、でも、山岡君はきちんとぼくを看病してくれた。

口でうまいこと言う人はたくさんいる。

だけど、山岡君は今までぼくが友達だった誰より、優しかった。おかゆなんてレトルトのパックでいいのに、ちゃんとお米から炊いてくれた。自分からは連絡しないって言ってたのに、ぼくの様子を聞くために電話をくれた。

山岡君は決して「最低」な人間なんかじゃない。

お互いの部屋に遊びに行くようになって、山岡君は夕飯が終わると必ず、「帰る」「帰れ」と言った。一線引いたつきあいが、ぼくにはどこかもどかしかったけど.....今ならわかる。昨夜、山岡君が「もう俺にかまうな」と自分からぼくとの縁を切ろうとしたのもそうだ。山岡君は...過去にひどいことをしてしまった自分のことを責めている。だから、ぼくとのあいだに距離を置こうとしていたんだと。

それが真面目さでなくてなんだろう。誠実さじゃなくてなんだろう。山岡君は「最低」なんかじゃない。

だからぼくは、なにも怖がらなくていい。

今まで通りでいい。

それが、悪寒に震えながらも一晩かけてぼくが出した結論だった。

だけど.....。

「なにを考えてるんだ」

三十分後、ぼくが鍵を開けるなり入ってきた山岡君は、険しい顔をしていた。怒っているみたいに。

「きのう、ちゃんと言っただろう。もう俺にかまうなって」

「.....かまってないよ.....」

ベッドへとUターンしながら、ぼくは手を振った。頭はくらくらするし、気分は悪いし、熱のせいか軀は異様に火照っていたけど、山岡君が来てくれたらもう安心だという気がした。

その安心感は理屈じゃなかった。背の高い、頑丈そうな軀。短くカットされた黒髪、真面目そうな黒い瞳。凜々しい印象の、男前の顔。――うん。この男が近くにいてくれれば、大丈夫。山岡君がぼくのそばにいてくれれば.....。

「かまってないよ。ぼくが.....山岡君にかまってほしいだけ」

布団へともぐりこみながら、ぼくは言った。肩が上下するほど大きく、山岡君は深呼吸した。

「――言っただろう。俺は犯罪者だ」

「聞いた」

でも。

「山岡君は自分がしたこと、悪いと思って、後悔してるでしょ？」

「.....」

「でなきゃ、自分のこと『最低』なんて、言わないでしょ？」

「いくら.....いくら後悔したって.....やったことは消えない」

「じゃあ、また同じことする？」

山岡君の大きな軀がびくりと震えた。

「するの？」

「しない.....しない！ あの時だって、もしも.....！」

山岡君は、小刻みに首を振った。

「もしも.....」

「なら、ぼくはいいよ」

ぼくは本心から言う。山岡君の黒い瞳を見つめて、言う。

「なにかは知らないけど.....山岡君はもう悪いことはしない。少なくとも、ぼくにはしないよね？」

その時、なぜだか、山岡君がはっとしたように見えた。ん？と思ったけど、ぼくは「しないよね？」と重ねて聞いた。

「.....ああ。しない。絶対に」

山岡君が重々しく宣言する。

「なら、いい」

ぼくは笑った。自然に笑みがこぼれていた。

「山岡君が過去に……なにかひどいことしたんだとしても……山岡君がそれを後悔してるんなら、いい。もうしないなら、いい」

「そんな……そんなかんたんに……」

「かんたんじゃないよ」

ぼくは布団の中から口を尖らせてみせた。

「ぼくは丸一年、山岡君と仲良くしてきたでしょ。予備校時代からならもう二年になるんだよ？

そのあいだ、ずっといろいろ考えて……ゆうべ、山岡君の話を聞いてからも一晩考えて、それで言ってるんだ。山岡君は自分がしたことを真剣に後悔してる。山岡君、高校時代はテニス部で部長だったんだよね？ 去年、ぼく看病してもらって、不思議だったんだ。山岡君はこんなにちゃんと人の面倒を見ることができて、コミュニケーションも取れるのに、どうして予備校でも大学でもいつもひとりでいたんだらうって。それって、悪いと思ったからでしょ？ 悪いことをした自分が、普通に楽しく人とつきあうのは、いけないと思ったからでしょ？」

一気に話して、ぼくはそこで一呼吸ついた。熱のせいで、やっぱりだるい。山岡君は呆然としたように口を少し開いて、ぼくを見ていた。

「ぼくは……山岡君がどんなことをしたのかは知らないけど……」

息を整え、ぼくは続けた。

「山岡君は優しいよ。人を気遣えるし、真面目だよ。ぼくはこれからも、山岡君と仲良くしたいし、つきあいをやめるつもりはないよ」

「……怖く……ないのか。俺が……」

かすれた声で山岡君が聞いてくる。不謹慎かもしれないけど、ぼくは笑ってしまった。

「怖くないよ、全然。どうして山岡君が怖いのか。……確かに山岡君は悪いことをしたんだらうけど……きっと山岡君は同じことを二度としない。ぼくにも、もちろん、しない。だからぼくは怖くないよ」

ぼくがそう言い切ると、ふらり、力が抜けたみたいに山岡君がベッドの傍らに座り込んだ。

「あ……」

床についた手が震えていた。

「……ありがとう……ありがとう、篠田……」

大きな軀を丸めて、山岡君は泣いているみたいだった。

目を開ければ、山岡君の横顔がある。

熱があるぼくを気遣って、山岡君は音を出さない。黙って本を読んでいる。

——もう、大丈夫。

うっとり目を閉じかけて、なんだか引っ掛かりを感じた。ぼくはなにか忘れてないか？

自問した瞬間に、耳に昨夜の山岡君のもうひとつの告白が響いた。

『俺は、ゲイだ』

犯罪者宣言のショックで、飛んでいた。……そうだった。ほかにも大事なことを聞いた。

『高橋が、好きだった』

彼女ではなかったけど……やっぱり、好き、だったんだって。

『大丈夫だ。おまえのことは、そんな変な目を見たことないから』

……って、え、え。それはぼくは恋愛対象外ってことで……。

改めて思い出して、胸がぎゅうっと引き絞られるように痛くなった。

いや、ちがうでしょ。そこは安心するところでしょ。自分に突っ込む。けれど、胸の痛みは取れない。

ぼくは握った手を胸に抱えた。心臓がすごくドキドキしている。

「どうした？」

気配に山岡君が振り返る。

「どこか苦しいのか？」

『胸が』

ぼくが答えないでいると、山岡君は立ち上がってベッドの傍らまで来てくれた。上からのぞきこまれる。

「顔が赤い。……また熱が上がったか？」

心配そうにぼくを見る黒い瞳。――この目は、高橋さんのことはどんなふうに見つめたんだろう？

「なにか飲むか？ 水分を取ったほうがいいぞ？」

優しい声。低くて、渋くて、男らしい声。――この声で、高橋さんにどんなふうにかけたんだろう？

「……どうした？ 吐き気でもするのか」

黙り込むぼくに、山岡君が顔を寄せる。

好きな人が相手だったら……高橋さんが相手だったら……山岡君はどんなふうになるんだろう？ 『変な目を見たことのある』のが相手だったら……山岡君はもっともっと、もおおっと、優しいんだろうか……？

ポロ。

「篠田？」

山岡君の声が焦りを帯びる。ぼくの中から涙がこぼれたせいだ。

「苦しいのか、痛いのか？」

ううん、ぼくは首を横に振る。顔を枕に隠す。

「……大丈夫……平気」

「篠田……俺がいないほうがいいなら……」

ぼくは慌てて布団の中から手を出して、山岡君の腕を掴む。

「ちがう！ ちがうから……そうじゃないよ！」

懸命に言い訳を考える。山岡君に余計なことを考えてほしくなかった。

「……山岡君がいなかったら……去年も今も……ぼく、ひとりだったのかなあって……誰にも心配してもらえなかったのかなあって思ったら……なんか泣けてきて……」

「……なにを言ってる」

小さく笑って、山岡君はぼくの髪をくしゃりとまぜた。

「去年はともかく……俺なんかにかまっていなければ、篠田はもっとたくさん友達が出来たぞ？」

『でも、ぼくは対象外なんだ？』

「……そうかな」

「そうだよ」

対象外通告をされてから気づくなんて、かなり馬鹿だけど。――好きかもしれない。ぼくは山岡君が、好きかもしれない。

「ありがと」

ぼくは山岡君を見て、なんとか笑顔を作った。

『変な目で見て、ごめんなさい』

心で謝って、ぼくは「ちょっと寝るね」と目を閉じた。

そんなことがあってしばらくの五月の大型連休に、ぼくと山岡君と一緒に地元に戻るようになった。春休みはバイトに明け暮れて帰省せずにいたら、親に帰って来いと叱られたとぼくがこぼすと、山岡君が、ぽつりと「俺もだ」とつぶやいて、「なら一緒に帰ろうか」という話になったためだ。

.....あれ以来。山岡君は少しだけ、明るくなったみたいだった。前よりはよく話すし、自分から話しかけてもくれるようになった。

そして、ぼくはといえば.....山岡君のことが好き、なんて告白ができるわけもなく、『いいじゃん、友達で。よく一緒にいるし、メシも作ってもらえるし、別に今のままでも十分、楽しいじゃん』なんて、自分に言い聞かせて、ざわつく胸を押さえていた。

でも実際、これ以上を望んだらバチが当たるって思う。

山岡君が自分のセクシャリティや過去を告白してくれたのは、それだけぼくを大事に思ってくれたからだし、ぼくのことを一番の友達としてつきあってくれているのもわかるから。

それ以上、なにを望むのかって話になると.....ぼくは「あわわ」ってなる。もっと近くにいたい、とか？ もっと.....できれば、あの力強い腕で、触れて、ほしい、とか？ぎゃああああ！

「も、十分！ 今のままで！ うん！」

「どうした、篠田？」

横で山岡君が目だけに笑みを浮かべている。

「さっきからひとりで百面相してるぞ？」

「え、ちょっと.....昔の失敗とか思い出して.....」

いやもう。ホントに。そんな笑みをたたえた瞳で見てもらえるようになっただけで十分ですってば。

そんなこんなの上での、連れ立っての帰省だった。

特急列車の中で、できたら一日ぐらい、予定を合わせて遊ぼうかって話になった。実をいうとぼくはこの連休中に、高校時代の部活の友達と会う予定があった。みんなで母校を訪ねてみるつもりだった。.....山岡君は母校を訪ねたりはしないのだろうか？ 聞いてみたかったけれど、あの宮園さんと会ったあとの山岡君の様子を思うと、それは触れてはいけない部分なような気がした。部活のOB会にも出ていない山岡君.....それはあの高橋さんや東って人と関係あるのだろうか.....？

ぼくの物思いを乗せて、電車は快調に走った。

特急で降りる駅は同じだけど、そのあと、それぞれの地元へは別の私鉄の路線を使う。それぞれ鞆を肩にかけて、改札を出て駅の構内を歩いた。昼過ぎの構内は買い物客程度でさほど混んではいなかった。

だから、その声がよく聞こえたんだろうか。

「アズマ、ねえ……」

構内に入っているドラッグストアの前だった。ちょうど店から出て来た人を追うようにして、もうひとりの人がその肩に手をかけて話しかけたところだった。

笑って「アズマ」が振り向きかける。その視線が後ろを振り向ききる前に、ぼくたちの上で止まった。無理もない、ぼくたちは二メートルと離れてはいない近距離にいたんだから。

それは東だった。髪はずいぶん伸びて、色も自然な栗毛色になっていて、印象は少し変わっていたけど、華やかなオーラと「イケメン」と呼ぶにふさわしい綺麗な顔は見間違えようがない。

「東、ねえ……」

話しかけていた後ろの人物の声が不自然に途切れる。

まるで電流でも流れたみたいだった。東とはタイプがちがう、でも、正統派ハンサムと呼びたいような、やっぱり目鼻立ちの整った綺麗な青年。年は東も、その人も、山岡君も、ぼくも、同じくらいに見えた。その、ハンサムな人の軀が、ぼくたちを認めた瞬間、電流でも流れたみたいにビクリと震えた。

あ。声のない声が出て、山岡君の足もぴたりと止まった。

一瞬、ほんの一瞬だけど、三人はまるで静止画のようにお互いを見つめて動かなかった。

最初に動いたのは、東じゃないほうの青年だった。軀は動かないまま、その瞳がずっと山岡君から外れる。まるで、嫌なものから目を背けるみたいに。

『高橋……！』

なんの根拠もない、ひらめきだった。これが、この人が、高橋さんだ！って。

次に動いたのは東だった。

「そういやあさ」

こちらはごくごく自然に、後ろを振り返る動作を再開させて、後ろの人に話しかけた。やっぱり、ぼくたちに気づかなかったみたいに視線をそらして。そして東は軽く一歩下がると、止まっていた青年の肩を抱いてぼくたちとは反対の方向に誘導した。

ふたりはぼくたちに背を向けて歩き出す。ぼくたちを……いや、山岡君を無視して。まるで山岡君がいないかのようにして。

一年半前、東は山岡君を一目見て顔色を変えた。それなのに今は……誰にも会わなかったような顔をした。もうひとりの――たぶん、高橋さんもそうだ。絶対に知り合いにちがいないのに。山岡君を見て、驚いたのに。なにも見なかったような顔で背を向ける。

ぼくはそっと山岡君を見上げた。山岡君は……ゆっくりと顔を伏せた。つらそうに目を閉じて、震える息を吐きながら。

――無視は、暴力と同じだと思う。暴力は軀を傷つけ、無視は心を傷つける。存在を無視するのは肉体を攻撃するのとも、罵詈雑言を浴びせるのとも種類のちがう暴力だとぼくは思ってる。

「ひどい……」

つぶやきが漏れた。

「ひどいよ……」

「……え」

山岡君が顔を上げる。

「だって……今の『東』でしょう？ 前、本屋で会った……」

「……」

「喧嘩になるのはよくないけど……でも、でもなんで？ 無視することないじゃん……」

「しょうがない……」

山岡君が力なくつぶやく。

「いいんだ、篠田。東は……悪くない」

「でも……」

おなかの中が熱くなった。山岡君は確かに昔、悪いことをしたのかもしれない。東と高橋って人は、その被害者だったのかもしれない。だけど……山岡君はあんなに自分のしたことを悔いていたのに。あんなに、泣くほどつらかったのに。

「でも……！」

二年間、山岡君は自分から人と交わろうとしなかった。今だって、山岡君がつきあうのはぼくだけだ。楽しいはずの大学生活。それを封じているのは、山岡君の罪悪感だ。なのに……なのに、それを知りもしない人が山岡君を無視する。それがぼくにはたまらなかった。

ぼくは駆け出していた。おなかの中が熱くて、頭も熱くて、じっとしていられなかった。

「待って！ 待ってください！」

駅の構内を走り、出口近くでようやく背の高い二人連れが見えてきた。

「待ってください！ 東さん！」

名を呼ぶと、ようやくふたりの足が止まった。東が振り返る。ちょうど太い柱の前だった。

あちゃーと、その口が動く。

ぼくが息を乱しながら追いつくと、

「先行ってて」

と、東はもうひとりの青年の背を外に向けて押しやった。

「でも、東……」

「大丈夫。この子、俺も知ってる子だから」

その言葉に、その人は「じゃあ」と歩き出した。

「んで？」

東がぼくを横目で流し見る。……なんかやたらと色気のある人だった。

「山岡のツレが俺に何の用？」

息を整え、精一杯、落ち着いたふうを装いながらぼくは東を正面から見据えた。

「……どうして、山岡君を無視するんですか」

「はあ」

馬鹿にしたみたいに返される。

「無視はよくないと思います。喧嘩もよくないけど……無視はもっとよくないと思います」

「そうかあ？」

柱に背もたれて、東はどこかおもしろがってるみたいにぼくを見た。

「俺が山岡の立場なら、無視してほしいと思うけど？」

「でも……！」

「つうかさ、あんた、どこまで知ってんの。あんた、山岡のなに？」

「ぼ、くは……山岡君の友達で……山岡君が優しい、いい人だって知ってます」

東はなにとも言わなかった。言わなかったけど、浮かんだ笑みが「ばあか」と言っていた。

ぼくは少しだけムキになった。

「ほ、ほかにも……！ 山岡君がテニス部の部長だったこととか！ 高橋さんと仲がよかったこととか！ あ、と……や、山岡君が過去にすごく悪いことをして、でもそれを死ぬほど後悔してるのを知ってます！」

「……へーえ？」

東の視線がぼくの頭上に流れた。

「ホント？ 秀にしたこと、おまえ、後悔してんの？」

慌てて振り返ったら、ぼくの後ろに山岡君が立っていた。やっぱり少し息を切らして。

「……取り返しのつかないことをしたと、思ってる」

「へえ」

「今は……俺がこんなことを言えた義理じゃないのはわかっているが……すぐる……高橋には、幸せになってもらいたいとも思ってる。もし、おまえとヨリを戻したんなら……」

「なら？」

山岡君はそこで静かに、深く深く、頭を下げた。

「俺のつけた傷の分、あいつに……！」

東が深くわざとらしい溜息をついた。

「頭上げろよ、おまえに頼まれるこっちゃないっつの。……すったもんだあったけど、河原からは取り戻した。あいつ、とんでもねえな」

「……あの人は、外面はいいがクセがある。要注意だと思ってた」

「言っといってくれよ、そういうの」

ぼやく口調で言ってから、東はぼくと山岡君を交互に、なんだかニヤニヤ笑いながら見比べた。

「――あんた、名前なんなの？」

山岡君が「答えなくていい」って言うのと、ぼくが「篠田啓吾です」って答えるのが同時だった。

「一年前……いいや、もうちょっと前か。本屋で会ったよな？」

「はい」

「東、こいつは関係……」

また山岡君とぼくの返事が重なる。

「じゃあ篠田君に質問」

東がふざけたように片手を上げる。

「あんた、この男に惚れてんの？」

「っ」

「！」

声にならない返事も重なる。そして、

「あ、あなたに関係ないです！」

って、ぼくが叫ぶ声と、

「そんなわけないだろう！」

って、山岡君が怒鳴る声が、また同時。

「……なるほど」

ひどく意地悪そうに、でも、愉しそうに、東の瞳がきらめいた。

「篠田君」

「はい？」

肩に腕が回って引き寄せられる。なんだろう？ 内緒話でもされるのか。そう思ったぼくはあまりに無防備だった。

とてもシャープで、でも、甘い部分もある綺麗な顔が、ずっとぼくに近づいた。

『え』

近過ぎる、と思った次の瞬間に、ぼくの唇は東に奪われていた。

「ん？ んんんっ！」

とっさに逃げようとしたけど、肩を後ろからホールドされて身動きできなかった。

唇は数秒、ぼくの唇に押し付けられて、離れて……ほっとしたのも束の間、また重ねられてきた。

「……んふ…ッ……ぐ」

驚いた。ほんっきで、驚いた。だって。

舌が。

唇を奪われただけでもショックなのに、今度は舌が。

ぼくの口の中に忍び込んできた。

……舐められる。口の中を。

「ん、……ん、ん……」

抵抗したい、東の軀を押しやりたい。だけど、ぼくの唇は東に吸われていて、ぼくの口の中は東に舐めまわされていて……東の胸を押し返すどころか、全身から力が抜けていくようで……。

「やめろっ！」

キスの終わりは突然だった。山岡君がぼくと東のあいだに割って入ってくれたおかげで、ぼくは東の腕から解放された。

びっくりしたのと、ほっとしたのとで、ぼくはその場にへなへなと膝をついた。

「篠田！」

山岡君が慌てたように手を差し出してくれる。

「なあ」

そんな山岡君の脇から東はひょいと顔を出した。

「今の、ファーストキスだろ」

頭真っ白状態のぼくは、東の問いに馬鹿正直にうなずいた。

「やり」

にやりと東が笑う。親指をぴっと立てて。

「貴様っ……！」

唸るような声を上げて、山岡君は東の胸倉を掴んだ。一年半前と同じに。けど、東の反応はその時とはちがった。彼は、もう笑っていなかった。怒ってもいなかった。

「――山岡」

それまでの態度とはちがう、東はいっそ、哀しげに見えた。

「今のおまえの顔、俺、三年前にも見たわ。鏡ん中に」

「……」

山岡君の手が、ゆっくりと東の服から離れる。

「篠田」

東はぼくの前に膝を抱えて座った。

「ごめんな。気持ち悪いマネして」

「……いえ……」

「山岡に、全部聞きな？ その上で、あんたが決めればいい。山岡とどうしたいのか。……でもな、ひとつだけ」

「はい」

この人、こんな笑い方もできるんだって、ちょっと意外なほど、静かな笑みだった。

「俺と秀…ああ、高橋ね、さっき一緒にいた。……俺と高橋は、幸せだから。意地張ってるんでも、無理してるんでもなくさ、ちゃんとお互いに過去があって、それでも今、めちゃくちゃ幸せだから」

ぼくは深くうなずいた。まだ意味はわからない。けど、すごく大事なことなんだろうなって思えた。

「東……」

身軽に立ち上がった東は、また、あのちょっと意地の悪い顔に戻っていた。

「あー山岡。勘違いすんなよ？ 俺は死んでもおまえのことは許さねえ。大っ嫌いなのも変わらない」

「ああ」

山岡君は真剣にうなずいた。

「俺も、おまえが嫌いだ」

でも、と山岡君は東に向かって頭を下げた。

「ありがとう」

東は悠々と立ち去った。駅にいる人々の視線を集めて、それでもなお、悠然と。

ぼくは……そんなわけにはいかなくて、公共の場で繰り広げてしまった、ぼくにしてみれば人生最大の修羅場に人々の好奇の視線が集まるのがたまらなくて……真っ赤になりながら、山岡君の影に隠れるようにして、その場をそそくさと立ち去ったのだった。

それにしても……なんてことだろう……。

キスされた、ディープキス。うわああ……。

「……のだ、篠田！」

繰り返し呼ばれて、気づく。山岡君が少し眉をひそめるようにして、ぼくを見ていた。

「切符、買うんじゃないのか」

はっと周りを見回せば、もうぼくの乗る私鉄の切符売り場まで来ていた。

「あ、うん！」

慌てて財布を引っ張り出す。

「……大丈夫か」

「うん」

と答えながら、ぼくは財布の中から小銭をばらまいてしまった。

「篠田」

拾い集めた小銭をぼくの手の中に落としてから、山岡君はなにか意を決したかのように、ぼくを見た。

「明日、会えないか」

「明日……」

「往生際が悪いと思われそうだが……もう少しだけ、時間をくれ」

「……うん」

はっきり言わなかったけれど、それが山岡君が過去に犯した罪に関することだとわかった。

ぼくがうなずくと、山岡君はほっとしたように見えた。

「じゃあ、明日。どこがいい？」

そう聞かれて、ぼくはちょっと考えた。

「ぼくのうちに、来てくれる？」

山岡君はうなずいた。

次の日の午後、山岡君はシュークリームを手土産に、ぼくの家を訪ねてくれた。なんの変哲もないマンションの一室だけど、山岡君は「いいところだな」って褒めてくれた。

「ごめん、かあさん、パートでいないんだ。お茶用意するから、待っててくれる？」

リビングのソファに座ってもらって、奥にあるキッチンでぼくはお茶を用意した。落ち着いて、落ち着いてって、自分に言い続けたけど、実はきのうからずっと、ぼくの気持ちはジェットコースターみたいだった。

東にされたキスも、もちろんびっくりだったけど……それより、ぼくの心を揺らしたのは、初めて見た『高橋さん』だった。

とても爽やかな印象の人だった。ぼくなんかよりずっと大人びてて、綺麗で……。

山岡君が好きだった人。ぼくとは全然ちがう人。

『山岡君は、今はどう思っているんだろう？』

そんなことを考えだしたら、寝られなくなった。

「インスタントだけど」

って、ぼくがコーヒーをお盆に乗せていくと、山岡君は膝の上に肘をついて、じいっと組んだ自分の手を見つめていた。

「……篠田」

静かに呼ばれる。

「はい」

お盆をテーブルの上に乗せて、ぼくはラグの上に座り、山岡君を見上げた。

「前に……話したな。俺は……犯罪者だって」

黙ってうなずく。

「俺は……高橋にも……東にも……無視されてもしょがないだけのことをしたんだ」

「……」

「俺は……俺と高橋は中学からずっと一緒に……テニス部だった。高校でも中学でも、俺が部長で、高橋が副部長だった。……親友……って、言っている関係だったと思う」

ぼくはまた黙ってうなずいた。

「だけど……親友の顔でつきあいながら……俺は、高橋が好きだった。いつか……いつかはわからないけど、いつか……高橋が俺の気持ちに気づいて、受け入れてくれる……そんなことを、俺はずっと夢見てた」

山岡君は右手で作ったこぶしを左手でぎゅうっと握り締めた。つらい何かをこらえるみたいに。

「……高三の時……高橋と東が同じクラスになった。それまでも……東は目立つヤツで……俺は、あいつが、気に入らなくて……。だけど、高橋は……高橋は東のことが嫌いじゃなかった。俺に隠して、嘘をついて、高橋は東と……東とつきあうようになった」

やっぱり三角関係だったんだと思った。山岡君と、高橋さんと東と。ぼくは床の一点を見つめた。

「なんでだって、思ったんだ。なんで……あいつなんだ、東なんだって。なんで俺じゃないんだって。俺は……ずっと見てきたのに。あいつだけをずっと見てきた……触れたくても、触れずに……大事に、ずっと大事に見てきたのに……」

山岡君の声が、細かく震えだした。

「……俺は、我慢してたのに……東には……東には好き勝手させたんだ、そう思ったら、もう……」

苦しげに震えて途切れた声に、ぼくは顔を上げた。山岡君の眉間には深いしわが刻まれている。

「……カラオケ、だった。カラオケルームで……打ち上げがあって……あいつは呑み過ぎてつぶれて……俺は介抱するからってひとり残って……そしたら、あいつが寝言で呼んだんだ、東って」

「山岡君……」

組んだ手に額を乗せ、もう軀まで震えだしている山岡君に、ぼくはうろたえる。当時の、山岡君の苦しさが伝わってくるようだった。裏切られて、行き場をなくした恋心の苦しさが。

「もう……もう、こらえきれなくて……」

聞きたくない。でも、聞かなきゃいけないと思った。

「レイプした」

「……」

「手を、縛って……嫌がったから、殴って……東にやらせてんだったらいいだろう、俺にだって一回ぐらいやらせてくれたっていいだろう！ そんな、そんな怒りで頭が真っ赤になって……止まらなかった」

ぼくは、ぼくも、痛いほどに手を握った。山岡君の犯罪行為。その告白に、ぼくの胸まで引き絞られるように痛い。

「……終わった時、あいつはほとんど気を失っていた。そして……そして……ソファが……俺のものも……あいつの尻も……真っ赤に……血で、真っ赤に……」

山岡君が泣いていた。泣き声とともに、言葉が押し出される。

「なにを、したんだ、俺は……なにを…ッ……東がしてることなら、いいだろ……っ、て……でも、ちがって……俺は、あいつを……っ」

「山岡君！」

激しい嗚咽を上げる山岡君に、ぼくは飛びついた。背中を必死で抱える。

「なにを……ッ……俺は、なに、を……ッ！」

広い背中が大きく揺れる。その背中をぼくは懸命に撫でた。――それしか、できなかった。

なにか言いたいのに、言葉がない。

だんだん、本当にだんだんと、山岡君の嗚咽は小さくなっていったけれど、ぼくはなんにも言えないままだった。

「……すまない」

涙でぐしょぐしょになった顔で、山岡君はぼくの手を押しやった。

「これで……わかったろう。俺は、最低の男だ」

大きく首を横に振る。確かに、確かに山岡君は最低の罪を犯したけれど……でも、山岡君自身が最低なのだとは、ぼくは言いたくなかった。

「高橋や東に……無視されてもしょうがない、いや、殺されてもしょうがないだけのことを……俺はしたんだ」

でも。でも……そのあとが続かない。

「……さすがに、呆れたろう？ すまなかった。今まで……全部、話すことができなくて」

「そんな……」

「もう、本当に、いい。篠田、もう俺のことはかまわずに……」

「え、やだ！ そんなの、やだ！」

ぼくは押しやられた手で、山岡君の膝を掴んだ。

「なんで……なんでそうなるの！ ぼく、ぼく言ったよね？ ぼくはつきあいやめないって。ぼくは……！」

山岡君はぼくの手を外そうとする。

「篠田。落ち着いて考えろ。万引きだとか、そんなレベルの話じゃない。俺がしたことは……」

その時、不意に昨日聞いた東の言葉が脳裏をよぎった。

「でも！ でも！ 東さん、言ってたじゃない！ 俺も高橋も幸せだって！ 今は、ちゃんと幸せだって！」

「それは……」

「ぼくは！」

ためらいも戸惑いも、羞恥も、かなぐり捨てる時だった。膝立ちして、山岡君に向かい、ぼくは宣言した。

「ぼくは山岡君が好きだ！ 好きです！」

「……」

「た、たぶん！ 友達として、じゃないと思う……わかんないけど……たぶん、そうじゃなく、好きです！」

顔が、どうしようもないほど熱い。きっと真っ赤になっている。

「……篠田、それは……」

「き、きのう……東さんにキスされて……初めてだし、びっくりしたし……でも、思ったんだ。もし、ぼくが二度目に……二度目にキスすることがあるなら……それは……それは……」

なにを言おうとしてるんだろう。自分が信じられない。でも、ぼくは思い切った。

「それは山岡君がいい！ ぼくは、山岡君と……！」

「篠田……」

山岡君の眉間に、さっきとはちがうけど、やっぱりしわが寄っていた。しまったって、正直、思った。急激に気持ちがしぼむ。

「……あ……ご、ごめん……」

ぼくは苦笑いしながら、正座の姿勢に戻った。手も、自分から引っ込める。

「山岡君は……ぼくのこと、そういう目で見れないんだったよね……あ、そっか。ぼくには絶対

そんなことしないって、あ、あはは、聞いてたよね。……ごめん、忘れて！ 勝手だけど、今はなかったこと……」

「バカっ」

叱るような声と、ぐいっと手を引かれるのが同時だった。

「あ！」

わけがわからない。ぼくは山岡君の広くて硬い胸に抱きしめられていた。

「バカ、馬鹿野郎……」

山岡君の大きな手がぼくの頭をぐりぐりと山岡君の肩へと押しつける。

「篠田が……可愛くないわけないだろう……そんな目で、見てないわけないだろう……」

……え。

「おまえを……不安な気持ちにさせたくなかった。……俺なんかが、また人を好きになっちゃいけないと思ってた。だから……」

それって……え？

少しだけ、軀を離される。山岡君の怖いぐらい真剣な眼差しが目の前にあった。

「――レイプ、だぞ？ 俺がしたのは……。おまえは、それでもいいのか。よく考えろ。俺が、怖くないのか」

「……よく、考えたよ……いっぱい、いっぱい、考えたよ」

そう、ぼくは考えた。訴えられていたら、罪になる罪。被害者と加害者しか、犯罪行為があったことを知らない罪。被害者が訴えることで初めて罪が成立する罪。

「でも……ぼくは山岡君が悪い人だなんて、どうしても思えなかった。山岡君は優しくて、いい人だって、ぼくは知ってた。……山岡君」

男らしい顔を、そっと指でなぞる。

「ぼくは、山岡君が怖くない。……ぼくは、山岡君が好き」

「……っ」

声もなく、ぼくは再び山岡君に抱きしめられていた。

二度目のキスは、ぼくが望んだとおりに、山岡君とのものになった。

＊ ＊ ＊

「その……」

実家から大学のある街へ戻ってきた日。いったん、自分の部屋に帰って荷物を片付けてから、山岡君はぼくの部屋に夕飯を作りに来てくれた。

狭いキッチンにふたりで立って、ぼくもジャガイモの皮を剥いたり、お皿を並べたりして手

伝う。それは今までもやっていたことだけど……その……想いを告げあって、そしてキスを交わしてから、そうしてふたりで料理をするっていうのは……なんというか、ひどくくすぐったい感じだった。新婚さん……的な。

はわわわ……！

ちらりと山岡君を見上げると、山岡君はいつもと……いや、以前と変わらない表情で淡々と手を進めていて……意識しているぼくがひとりいやらしいみたいだった。

「あ、山岡君、野菜炒めを載せるお皿はこれでいい？」

ぼくは自分の中の変なテレを払拭しようと、なるべくいつもと同じ調子を心がけて山岡君に問いかけた。

そしたら。

「……篠田」

って、山岡君が包丁を置いてぼくを見たんだ。

「その……」

山岡君が何事か、言い淀む。ぼくはなぜだかコクリと唾を飲んで、山岡君の次の言葉を待った。

「その……」

何度か言いかけては止まってから、山岡君はようやく次の言葉を口にした。

「啓吾って、呼んでいいか」

って。

ぼくは正直、「へ？」と思った。なにかひどく言いづらい、あるいは大事なことを山岡君が言おうとしているんだと思って、緊張して待っていたから。

「いいよ？」

ぼくは怪訝な顔になっていたと思う。

「いいよ、もちろん」

山岡君はひどくほっとしたように見えた。

「そうか……」

「じゃあ、ぼくは大輔って呼んでいい？」

なぜだろう。山岡君はぼくのその言葉に一瞬、ぴくりと軀を震わせた。そして黙って、首を縦に振る。

「じゃあ、大輔」

呼んでみたら、なんだかそれはとても親しげで、特別な感じだった。自然に笑いがこぼれた。

「えへへ……大輔。……大輔」

びっくりした。笑いながら何度も呼んでいたら、突然、山岡君の眼から涙がこぼれ落ちたから。

「えっ、山岡君、どうし……！」

それも突然だった。ぼくは山岡君の腕に抱き寄せられ、ぎゅうっと抱きすくめられていた。

「啓吾……啓吾……」

呻くように何度も呼ばれる。

「うん、うん……大輔」

ぼくの肩に熱いものが沁みてきた。山岡君の……大輔の、涙。

それがどうしてなのか、わからないままに……わからなくてもよかったから……ぼくは大輔の広い背中に腕を伸ばし、大輔を抱き返した。

そんなふうが始まったぼくたちだけ……ぶっちゃけ、大輔のキスはいやらしい。

東とのキスはやたらと長く感じられたけど、実際にはものの数秒だったんだろう。その数秒のほかには経験がないから、比較対象があるわけではないけど。

大輔のキスはいやらしいと思う。

どちらかの部屋で夕飯を食べて、そのあと、テレビなんか見てると、大輔の腕が伸びてくる。引き寄せられて、ぼくはすっぽり、大輔の足のあいだに納まって、テレビを見ることになる。

そのうち、大輔の指が、今度はぼくの顎のあたりに伸びてきて……ぼくは斜め後ろを向かされて、大輔がかがみこんでくる。

唇を吸われる。

ねっとり。時には音を立てて。

唇で、唇を可愛がられる。

ちゅっとならば。きゅーっと吸い上げて。はむはむって、唇で挟んで。

それだけでドキドキしてしまうぼくはなんだろう。

「あ……」

吐息まじりに、ちょっといやらしい声が漏れてしまう。そうすると大輔はぼくの脇の下に手を入れて、ぼくの向きを変えさせる。

向かい合って、また、キス。今度は舌が入ってくる。

「ん……んあ……」

逃げられないように後頭部を押えられて、口の中を舐めまわされる。舌を引き出して、吸われたりもする。

もうぼくは、ガクガクだ。脚にも力が入らないし、ぐずぐずと崩れ落ちそうになる。

だけど、大輔は大きな手でぼくの頬を挟んで、キスを続ける。

唇を吸って。

厚い舌で、ぼくの頬の内側や上顎まで、舐めていく。時には、舌先がちらちらとくすぐるようにも動いて、ぼくはきゅーっと肩をすぼめなきゃいけない。

「……ん……んふ……」

「啓吾……可愛い」

キスの合間に、低くて渋い声でささやかれる。ぼくはそれだけで背骨の下の方がずーんって、疼くみたいになる。

「や……」

だけど。ぼくはぼくの軀の中に起こる性の快楽にまだ慣れない。つい、反射的に軀がすくんで逃げるような素振りになると、大輔はすぐに手を引く。

「悪い。がつついた」

って。

それはきっと、大輔の中の消えない傷のせいなんだろう。

ぼくは「ううん」と首を振る。ちょっと、恥ずかしいけど。「大丈夫」って、ささやく。

それでも大輔はぼくが嫌がるのを怯えているみたいに見えるから……ぼくは自分から小さく大輔の唇にキスを返す。嫌がってないよって伝えたくて。

「ぼくも、好き」

そうすると大輔はまたキスをしてくれる。

……ホントにいやらしいキスを。

数ヶ月かかって……ぼくたちは時々、裸になって抱き合うようにもなった。

裸になって抱き合って、深くて濃いキスをする。

「啓吾……好きだ」

大輔は、ぼくの首筋に顔を埋めて、そう言ってくれる。

「ぼくも……」

ぼくは、以前は服越しに見るだけだった、広くて逞しい大輔の背中を抱き締める。

素肌の触れ合う温かさと、柔らかな重みに、溜息が出る。

「うれしい」

思わずつぶやくと、大輔が「俺のセリフを取るな」って言う。

ぼくたちはキスをしながら、互いの性器を握り合う。

ちゃんとお互いに高め合って、愛撫しあって……って、なればいいんだけど、ぼくはすぐにいっぱいいっぱいになってしまう。

だって。キスして、アソコをさわられて、なんて。それに言っちゃあなんだけど、大輔のさわり方はキスと同じくらいいやらしいし、ねっとりしてる。

優しく優しく握ってくれたかと思ったら、先端の丸いところをくりっと撫でてきたりして。

「あ！」

声を上げたら、今度は割れ目をくちゅくちゅと弄られる。

「……！ ……！」

ぼくはびくびくと震えずにいられない。

それで舌を吸われたりなんかしたら、ぼくの手は大輔を愛撫するどころじゃなくなる。

「いいんだ」

って、大輔は言う。

「おまえが気持ちいいなら」

って。すごく、優しい目で。すごく、優しい声で。

「もう……」

ぼくは大輔の胸に赤くなった顔を埋める。大好きな人の胸に。

＊ ＊ ＊

「山岡」

「ああ」

歴史研究会のメンバーに話しかけられて、大輔が振り返る。

「なんだ、おまえ、たまには自分でノート取れよ」

笑って話す。

予備校と大学一年のあいだ、大輔がまとっていた暗さは、だんだんに薄くなってきている。

「大輔、ビーフシチューが食べたい」

「またおまえは手間のかかるもんばっか……」

笑顔も自然。

だけど……。ぼくたちがキスを交わすようになってから半年が過ぎても、ぼくたちはまだ最後の一線を越えていないままだった。

「大輔、大好き」

「俺もだよ」

こつんとおでこをぶつける。

『真っ赤に……血で、真っ赤に……』

大輔の泣き声とともに吐き出された言葉はぼくの耳に残っている。犯してしまった罪の記憶は、大輔の中にきっといつまでも残るだろう。

でも――。

いつか、その記憶が、悔いだけ残して、痛みのないものになるようにと、ぼくは祈る。

『高橋さん、ごめんなさい』

ぼくは心の中で謝る。

『でも、ぼくは、この人に幸せになってもらいたいんです』

幸せになることを、許してください――大好きな男のために、ぼくは祈る。

身勝手な想像だろうか。ぼくはほとんど信じている。

「もう、いいのに」

って、高橋さんはきっといつか、笑ってくれる、と。

end

君がくれる罪の赦し

<http://p.booklog.jp/book/102259>

2011年12月30日同人誌として発行
2015年10月30日パブーにて公開

著者：楠田雅紀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kusuda-masaki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102259>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102259>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ